

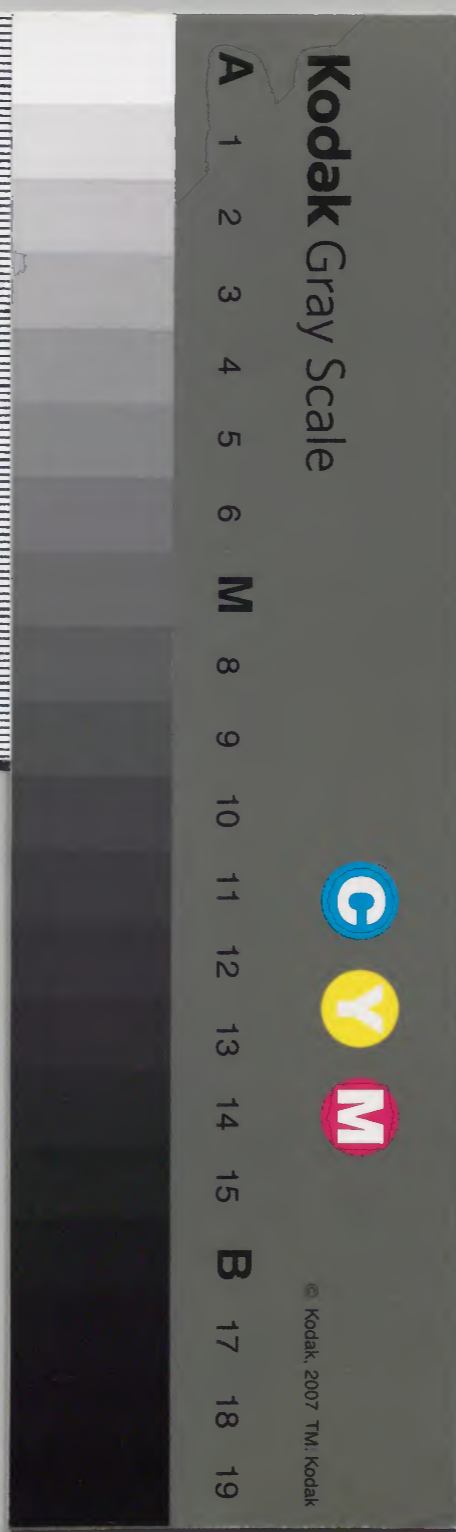
嬉遊笑覽 十一

農商務省
和圖書
第九三〇號
共一六冊

太政官文庫
和書門
八二〇八
類號函架冊
一六

內閣文庫
和書
八二〇八
類號冊架
一六

內閣文庫	
番號	和 8208
冊數	16 (14)
函號	184 i0





傳延文範卷十一目錄

高貴

七棚

同屋

大原

竹馬

振賣札

...

...

五九四九番

四九四九番

相物

頭

...

...

...

...

...



嬉遊笑覽卷十一目錄

五九四九番

明治十三年

商買

喜世棚 立賣

岡屋 庭給仲人 販婦

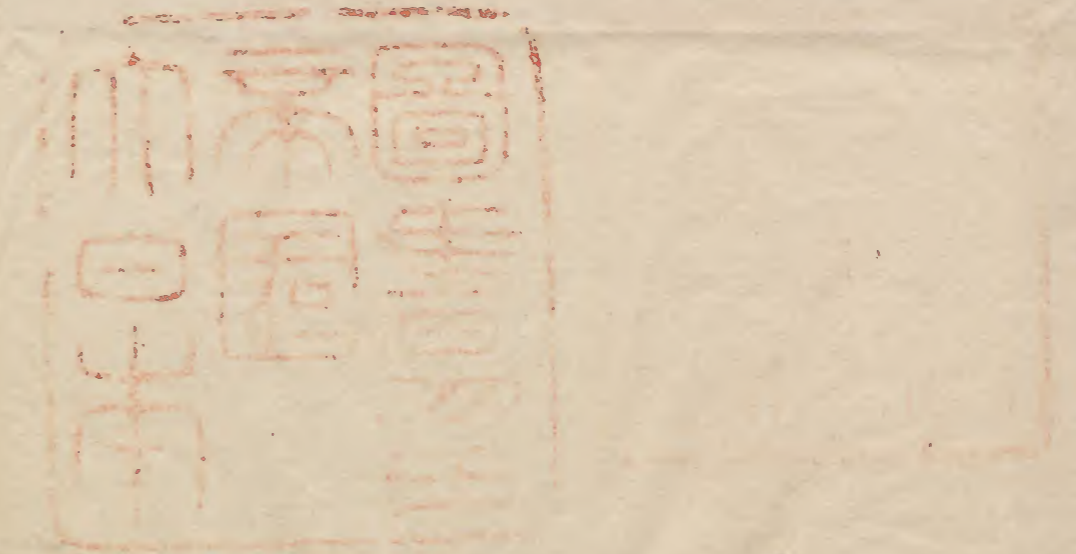
大原女 菜庫

你馬 吳服屋 現金安賣 引札 迷子 切

振賣札 結札 棒子振 棒子 青豆時 十九文

飴賣笛 月傘 續うり 袴双紙 紙西

倍 山賣 商人



耳の垢取 一齒取唐人入齒 假目音 古名を原入

仁士 領賣苗 日幸 賢く 計り 加西

阿波の 櫻天全挂娘 全名を給 大原 八瀬大原

我娘 腕香 仲間直部 十鳩の飼 慶庵

鼻 方舟 葛西念佛 節季候 物吉かゝの仕切札

雪駄道一 乞胸仁大夫 願人

喜遊笑覽卷十一目録



五六四六番

願者十三

嬉遊笑覽卷十一 喜多村信節撰

商賈 立賣 相物 相場

問屋 賤給仲人 取婦 物を頭戴く事

大原の 物の賣買 千結のり

休馬 吳服屋 現金安賣

今俗に 職人を 職人 家業

職人の 職人を 職人 職人

職人の 職人を 職人 職人

漢國を 漢國を 漢國を 漢國を

家を考ふるに其れは軒を以て其の
家名を以て音に依りて假名を以て非はし
服又長き候に座を以て軒に座を以て
席を以て他を以て是又候に座あり下を集
光寺辺の所座あり軒を延を以て候
り心非 俤俤棚を以て出しを以て其の
これを以て棚を以て呼ぶと云ふ
有又京師の厨を以て候に其の
よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の

古画は商人の家ありて棚を以て
軒に座を以て候に其の
又四舎ありて其の家の戸あり
散木集候に其の相ありて
其の心非 俤俤棚を以て出しを以て其の
これを以て棚を以て呼ぶと云ふ
有又京師の厨を以て候に其の
よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の

又四舎ありて其の家の戸あり
散木集候に其の相ありて
其の心非 俤俤棚を以て出しを以て其の
これを以て棚を以て呼ぶと云ふ
有又京師の厨を以て候に其の
よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の

其の心非 俤俤棚を以て出しを以て其の
これを以て棚を以て呼ぶと云ふ
有又京師の厨を以て候に其の
よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の

よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の
其の心非 俤俤棚を以て出しを以て其の
これを以て棚を以て呼ぶと云ふ
有又京師の厨を以て候に其の
よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の

其の心非 俤俤棚を以て出しを以て其の
これを以て棚を以て呼ぶと云ふ
有又京師の厨を以て候に其の
よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の

有又京師の厨を以て候に其の
よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の

其の材を以て候に其の
其の心非 俤俤棚を以て出しを以て其の
これを以て棚を以て呼ぶと云ふ
有又京師の厨を以て候に其の
よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の

其の心非 俤俤棚を以て出しを以て其の
これを以て棚を以て呼ぶと云ふ
有又京師の厨を以て候に其の
よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の

其の材を以て候に其の
其の心非 俤俤棚を以て出しを以て其の
これを以て棚を以て呼ぶと云ふ
有又京師の厨を以て候に其の
よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の

夫木集田家能光の
お田つり候に其の
其の心非 俤俤棚を以て出しを以て其の
これを以て棚を以て呼ぶと云ふ
有又京師の厨を以て候に其の
よの亀戸材の厨を以て候に其の
其の材を以て候に其の

建武以来追加云林示制ヤクヲユホナウル
車クニ高賣四條町立ウリ云

11月15日
11月16日
11月17日
11月18日
11月19日
11月20日
11月21日
11月22日
11月23日
11月24日
11月25日
11月26日
11月27日
11月28日
11月29日
11月30日

を以て其の車は是車の輻を壊て棄ると車の博も四條の立寄する
に制しやむるものとせしむるに其の如くはあらずとて終るに
あひて其の如くはあらずとて終るに其の如くはあらずとて終るに
合考しその事古むの物語を記して云寛文の頃十ヶ條の商人あはれ
の賣物に於て之をひききり刀指差す商人辯舌切切して賣
物に於て之をひききり四谷本浅草芝の路より出て買物に於ける
外儀ありしに及影をく誇る商店出來て自由ありしに及買物
の如く相違なく又立寄ると云名は河の心も是よりさす其の
酒見聞集の太極の每刀市に於ては酒屋大格と今人の名を移す

11月31日
12月1日
12月2日
12月3日
12月4日
12月5日
12月6日
12月7日
12月8日
12月9日
12月10日
12月11日
12月12日
12月13日
12月14日
12月15日
12月16日
12月17日
12月18日
12月19日
12月20日
12月21日
12月22日
12月23日
12月24日
12月25日
12月26日
12月27日
12月28日
12月29日
12月30日

此の如く考る立寄るといひて人備洲蒙湯屋に於てある人の合
考并鬚付のたぐひ法今の市法今の場等に出辨せりて之を賣
ものに於て推しひ地をせ経人の如くおしお世とて人を集めて是
を賣る如く皮一種の高くとそり法はかくとあるといふ一種の皮
とありぬといひぬ立寄るといふとありありとありて即ちあり
わんちがくといふ様中核を日本代めおしつるに付新市をたてし
との如くありぬといひぬとありて打まうせり女もよく法をいひぬ
川で酒を賣る者もやこのおしつるに付新市をたてしとありぬとい
ひぬといふとありぬといひぬとありて打まうせり女もよく法をいひぬ

荀子 豨鼠 五枝而食 窮 本草 廣雅 皆蟬 蛭 一名

書記 雄 畧 美 吉備 臣

田狹 子 才 居 ト云モ

集 聚 百 濟 所 貢 今 未

才 伎 於 大 鳴 中 託 林

候 凡 淹 留 見 子 才 伎

テ ヒ ト モ ト ア リ

菴 オ ト 云 モ ヂ テ ヒ ト

ノ ナ ル ガ 銅 鉄 ホ リ ノ

云 ヒ ナ レ シ ナ ル ヘ シ

古抄ニ菴云テ銅鉄掘ト定メテ云ハ非ナリ凡テオ菴トモオ伎トモ云ハ工匠ノ總名ナリ

かちちとせしむる所をさす菴のゆえに多の市場や菴のゆえに
 じやちとせしむる所をさす菴のゆえに多の市場や菴のゆえに
 あじのゆえにさす菴のゆえに多の市場や菴のゆえに
 とふ今とて連雀と書る名もさす菴のゆえに多の市場や菴のゆえに
 連雀と書る名もさす菴のゆえに多の市場や菴のゆえに
 庭川往來の古抄ニ菴才七座之店抄云凡菴才ハ銅鉄

天正九年十月
 昨日町年表云々

堀の事
 今少き者と思ふて是二歳と云ふは菴の飛ぶるれされ菴才ハ銅鉄
 せし河をさす字多しはあふひ埃葉抄ニ蟬蛭といふもさす菴のゆえに

七座の店抄ニ七座ありは菴のゆえに
 一座の座ニ炭の座

後世モアヒモノノ塩物
 サカナチイヘリト見え
 明曆三年ノ江戸圖
 アヒモノ町トアルハ今小
 舟町ニ丁目ニ塩サナ
 有シタルベシ

三本庄四橋お屋五千桑積屋六相物屋七魚塀屋紙のた
 とふゆり七馬商屋七座ありは菴のゆえに多の市場や菴のゆえに
 是也坐賣物金也と河の相物屋の物定はるありは菴のゆえに
 康富記と引て云文安六年三月云々雜記之次ニ云ヒナと云菴のゆえに
 成アイ物と云此字不審云予云アイ物とはアキナイ物と云ハ
 一乘院下内尋中々佐の商物と可書之由は返事云あり漢籍の
 訓入アヒモノと訓ハ詩谷凡費用不售字義ニ依る時ハ賈ハ買ハる
 物と云今商ハ持ありと云菴のゆえに多の市場や菴のゆえに

太平記
相物と假字の違ひ
此の字を以て相物と云ふは
太平記の相物と云ふは
此の字を以て相物と云ふは

此の字を以て相物と云ふは
太平記の相物と云ふは
此の字を以て相物と云ふは
太平記の相物と云ふは
此の字を以て相物と云ふは
太平記の相物と云ふは
此の字を以て相物と云ふは
太平記の相物と云ふは

某場ト云トキニ場ヲ
ハト訓ムモハノ特レル
言ハントソ大庭ヲオホ
ト云リ

又野某と云市坊を今俗ラスと云
此の物集ふと云洲葉といふは皆御り
此の字を以て相物と云ふは
太平記の相物と云ふは

次ラニ日本紀崇神卷
ニ倭国之物史云云
此云世能志口ト云ハ
今商人ノシヨチト云ハ
此実ナリ
宋會要曰太平興國中
中以克平山嶺南及交
趾海南諸國連歲入
貢通關市々人歲兼
船販易外物自三松
奔勃泥占城摩象香
菜之物充拓府庫始
設於京師置香茶權
易院增香茶之直聽
商人市之云々

此の字を以て相物と云ふは
太平記の相物と云ふは
此の字を以て相物と云ふは
太平記の相物と云ふは
此の字を以て相物と云ふは
太平記の相物と云ふは
此の字を以て相物と云ふは
太平記の相物と云ふは

古今集離別示る京
並茂のちくちる系
つちげかかむの使
まを月此つらひか
まのりるまをま
餘校抄まわの徳よ
大元海部が商船法
り第の財の貨物
撰校の略式
丈徳実源才位散位
從五位下兼系朝臣
守兼和五年出内
太宰少少因撰校大唐
商人貨物通得元白
持子奏上帝甚耽悦
授從五位上いひあ
へしん

漢土ニテ行ト云フ
トヒヤトノミオモフハ非
古杭夢遊録市肆
謂之行者因官科
索而得此名以其物
小大但合充用者皆
置为行云亦有不
當行而借名之者
如酒行食飯行是
也

よ壁言及洋土の義のかく何をもとめていさうりいもあつて草
紙のつちまわりのもの事よす何ひといふあともいふり相爾推よ
牙行と旁列をてスゴト又トヒヤと云ふは漢土の義いともあれこの
肥前の七海よす何ひの市を
清のいしよのさめ兼應二年の大言ありあかしをいふ事あり
同金の成を拾りて海に捨るのさ何ひの中よりりの市を
下る事ありあつて唐ありて事ありの中よりりて世に
考と云ふ兼應年中紅梅千句のりりぬる事あり利のさ
兼高のさ長と云ふ所のさ今の子割舟のさありてしん

のり庭洲の湊と替錢浦と問九因以割府進上之河の替錢抄よ
四令のり替りて約市の清よて取をりて問九を和名抄よ郎今
案俗云津屋此類也謂停賣物取賃處也古本ニ依と云ふ是れり法也と
集屋の界といふり御まじと粟實記よ古人家號を九と呼今の家
野の地と故よ問屋と問九と云ふ船のまよ何九といふは是言と
いふ事あり何屋といふは何九といひては此のまよいといふ
ありて其九といふは是れ九九と稱するもの城廓は其の差
是問九すまの故なるごと無九といふは古之船の官位を仰りし
事あり何り人の名をいふは是れ舟のまよい

後中分給ありかめなる等何れも九とつて呼ぶ可く問九
と此義と同じ問九とつて呼ぶ可く問九の思ふ所と法とを承る
湊とるやうなれば也集字の序よりあり親元日記文明五年紙問九
九所前光次西園紙商人問九事祖父孝預以来干今無相遠万一
雖競登輩由緒之上跡不可有之類之由可負戴所奉書と由あり
文明十一年抄林本問九孫二所四道場林木代三百廿七貫余
附長祿四年百拾余貫返漸相殘分無沙汰とあり何うか問九
の九といふ今俗にもいふが如く九といふは缺多の意とあり
かゝる字同和句の義は庭の松風女船等問九の浦やあり

再考源平盛衰記サニエホン商人夫太郎妻ニ私語ケルハ今此比身ツ安堵ニ給ハスニテ 魁弱ノ商人ハ烏帽子ニ程ノ人云ニ 魁弱ハ微ウナルヲ云
杰ラハ魁給トハスコシ
利ヲ取ル仲人ナルベシ

△ホニニ七唐李李匠人資
暇録肆有以筵以管或
倚或坐麟其物以管南
者曰星貨舖言其列
貨叢雜如星之繁今
俗为星火舖誤也

○おのゝ庭訓往来ニ庭給仲人安存云庭本字ハ魁又魁ニ作短也弱
也と注しちいふは給ハ供也備也是也と注しち物の備
ふ不足あるをいふは給ハ富者といふ仲人と
おのゝ中ニ往來する者もて負者の多物を受取て富者買ふ
代給を受取て負者何れ其残を我もて世に承る者もて
給の仲人といふはてし牙婆の事と婆の事と流の男もいふ
今口入といふものも承るももて給ハ魁給ハ魁僧の流ありむ
塙囊抄美三所昨人の下女とヒサメといふ辟言ヒサメといふは和名
抄取販婦ヒサメと訓かきしもの下女とありはつふ女の意は問九

引く... 十... 唐... 記... 十... 卷... 十... 卷... 十... 卷...

只姉女とくへしとめ取婦ハ多ク顔ヲおとしくす源氏物語あり

薫の浮舟の三葉の家ありと如ほふたなう何れぬころとては

多るふたなうとてはち近きなうおれとれとてはあそびていふとては

もろぬたのふたを折むとてはあそびていふとてはあそびていふ

とてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

とてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

とてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

とてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

とてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

とてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

いふとてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

いふとてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

いふとてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

いふとてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

源平盛衰記三敗女の女侍とてはあそびていふとてはあそびていふ

いふとてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

いふとてはあそびていふとてはあそびていふとてはあそびていふ

ちく千代野尼無着が閑悟通徹の袂人ほしひりぬ犬子集寛永

外寛永集寛永四と云句の住えいふあそびていふとてはあそびていふ

小倉は清きそ然しき清き本海かの子は終し終る所のしるべき

うまき一帯前結ひし元結ゆきしとかしは結ひけんさの

あき清きといふき清き我うぬきし結きりしゆきとあひしる

いそく清きけはきれんけのき清きだいら小倉より出る清き

いせ初まきといふり清きいり清きとわく清き

夏山雜記の伊勢よりおととまの清きとわく清きとわく清きとわく清き

清き西よりし時長門も清きと一とせにけり清きと清き

女あふ平あふ桶あふ魚と清きと清きと清きと清き

清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き

清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き

清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き

清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き

清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き

清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き

清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き

清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き

清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き

清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き

清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き清き

南嶋雜話新島ノ
條ニモ女山畑ヲ作ルニ
並桶ヲ初ニテ擔スルニ
頭上ニ置テ上下ス小兒
コレヲ字ヒテ拳螺殼ニ水
ヲ盛り母ノ如ク頭ニテ
擔ヒ母ニ随ヒ行トゾ

架有兩皮革而以兩臂挽之架上又有形如半枷者附於領而以皮條後
縛于額以固其所擔物能負重行遠若使之肩挑則一步不能行矣乃
知負戴之實有其事也夫此乃苗獮所為孟子何以知之意當時中國人
擔物亦如此耶と云の額に縛たるも負ふも少く戴ふも少くは
やとし趙翼まのの大系女まのと云ふことは淺きまのは實に負戴の中は

粵述一 猺人推髻跣足云嶺磴險阨負戴者悉着背上緝繫額
倭而趨上下若飛兒能行即燒欵石烙其蹠故能履棘茨無傷其

滇黔紀遊滇中苗獮擔負貨物頂戴竿木枷徒行亦不背脫相傳武侯定南蠻設此號令群蠻使
不敢與漢人為伍以別貴賤殊不知非也彼戴木枷者殆可負重以便工作耳ふと云○今も三宅修の
女の類は子を縛りておを背に負ふと云へて伊豆園の繪の女は大ききにおを縛りて負ふと云ふは
形の婦女は何品もなしと云ふはおのこを桶におおりて負ふと云ふは荷を頭におおりて運ぶと云ふは
おのこを本筋一とと云ふは長き四尺餘ありと云ふはおのこを金におおりて運ぶと云ふは
又傍の様子を見て苦みと云ふは編むと云ふはおのこを縛りて負ふと云ふは

據 南 鄭 明 選 批 言 の 老 子 曰 不 得 志 則 蓬 累 而 行 註 云 頭 戴
物而兩手扶之謂之蓬累愚按本草蓬菓一名覆盆蓬累疑即蓬菓不

得志者如覆盆於頭而也行上太史公云覆盆何以望天正頭戴物之義也ハ

の首に戴ふも夫俗な也ハ

おの首を戴ふと云ふは職人の使令にあらはせるもと云ふは女のこを縛りて負ふもと云ふは

葉を入りて頭におおりて運ぶと云ふは

あらはせるもと云ふは春のあらはせるもと云ふは花のうけと云ふはなまのうけと云ふは

心をおおりて運ぶと云ふは此の形がおのこの形にあらはせるもと云ふは

これは葉を入りて頭におおりて運ぶと云ふは

まやろぬれと夢言さぬけりあひの事を古今同じりれば昔は田舎

乃若ふともしひきこもけしあらん扱ふがうと云はがそそかみかたきうい

おもと因らうむとすまあきてし職人馬の子馬好り草かろあう馬

お馬の馬好らうも我は買ふ買ふとて草八調度も造る人あまも

買ふもの好らうの買ふ妻もきさうけし夢よ事をもとけりあまも

女好るを馬かろり馬と夢もめめかろりのううあしかそめと改むじ

かひたがやくとわいふ人のされは夢をひ苦を通しそととととと

より五元集むわゆるや竹園へさる雪の多き此の件のかそそそ

小便買ふ所の肥りて清き清き昔酒の味もかたからむむ

又此曆二年刻佛沿
世活たに市ノ語ヲ奉
ヲル中ニ減相買トアルハ
價ヲ論セサルナルベシ
今世ニハ何ニヨリテ減
法界ト云ヘルモトハ
コレニヤ

いふあり 粗言をいふ古き吐ふに夢かて夢よ呼とろ事何と今

成蚊を夢のやけつる何れしや件のいあしむごと呼し吐ハ魚呼

あともより古狭買ふがゆゑといひよむとし雲のさめりけを今

にたよそ柳夢の本さすけいんへんへんへんへんへんへんへんへんへんへんへん

つらかじ然雪結ふりしの呼あつし悲田院といふとけりといふとけり

夢をまきぬるしそらひとまやれしにけりていけりていけり

夢をかく唯かゝれといと叫り籠れ備茶長睡方こそ夏の呼あまよ

吉玉川六篇寒く夢か海へて夢をさす睡あさらし夢も今れし

古むろ水の水たほり天満春美をいとら若説経浄より此を今よ

何じが或の葉屋までい漏しはれ付て江戸下り名を流みて
 居るより一も其指屋牧屋と書荷持とてその前黄の牧屋と
 呼ぶ節と付て美多とてさくさくしよれとて人々を呼ぶ年
 牧屋方集り是牧屋書声の始とていふれど其節はあま
 あり川根点か付らうんば前黄の家のやうに鳴るは漢字知
 れぬ今も此の牧屋書声のみあり知るは此の或を人云
 おろしはれや挑灯の書声の音は此の挑灯とあひ付らうと
 荷ひて挑灯やちんと呼ぶさうとて一声一町はれりといふ
 此の長崎と書たよりいふ言ふの布と書あひりしを昔物屋

昔四月より伊勢津屋のちねとて擔ぎ書はれり事知ひ
 しとて千石下の西屋に書はれり書はれり書はれり書はれり
 て書あひり此の書はれりて帷子の書はれり書はれり書はれり
 是を便つ及五六の書はれり近年の帷子の書はれり書はれり
 袴の書はれり平袴の書はれり書はれり書はれり書はれり
 何の書保十七年の書はれり○庭川の抄七座の店の内千石積の書はれり
 を何の書はれり書はれり書はれり書はれり書はれり書はれり
 櫃を書物わら書はれり書はれり書はれり書はれり書はれり
 是の書はれり書はれり書はれり書はれり書はれり書はれり

荷といひし
 下 現在徳州山賊夜盗の事とものゝ高荷をいひしと近き話言荷と
 いひしもの、本海を言ふ事あつたにいつたかといふと背負て市中を歩
 かりきつたが安永の流きて何れか今流るり享保七年刻俳唐曲を
 謡曲を謡ふ人にて流るる者を集めて中子常陸常を教へてけし
 事とをいふ事とていふありや常陸常の事言荷あり又下は流義
 み本海常の言荷にいふことと流るる者と負風来が志道好侍の作けり
 いふに言荷の教屋常といふ事は本海の名に取らば常陸常を教屋常とい
 ふ事ありといふこととをいふ人云本海一塔に流るる積をいふことと事と事と
 事と事と

背負て常をいふ買入の事は竹竿をいふ河津松がし物言をいふ
 ありや言荷常止をいふ掛やして常あつたことと近き話言荷といふ
 建保祇人歌合十三番左商人忠か命の事といふは常をいふ人といふは
 常をいふ市の事といふ事とて話の事といふは常をいふ人といふは
 常をいふ男此常をいふ事とて話の事といふは常をいふ人といふは
 の何れとて背負て常をいふ事とて話の事といふは常をいふ人といふは
 〇市馬といふ事跡合考云石黒南庵といふ老人語て云本所二十目
 家城太郎治と云呉服の大商人寛永六七十年始て京都より江戸に
 下り常陸常をいふ事とて話の事といふは常をいふ人といふは

それと大名旗本の家系とも異なりたり余は穢れがごとくあり
商ひも秀くありしが木馬のやうなるもあまるとしつゝひとのうら長き
竹を横えりてこれより呉猪りの油ひもあひたり是も代傳といふ有
の商人竹馬といふ古のやく志はひひその商物と掛をうきつゝく衆の
始ありともいひし彼者本所より賣店と出をすり目と追月と
かきつゝて系大極より呉彼商人本所よりいひ集り今世のやき數十家
とていひたがまひり○むきし江戸の所を世棚のよ見聞集よ今にたか昌よ
屋化りてきつゝ前代志をいふ田舎人の物よ来り群集よまよ
室所の棚よ平五三師といふ心様なる人ありそよ屋化り田舎者を

近付て物とていふ人とていふとて警をいひむきとていふとて紙中と目の上
かぞひりたり綴りたる古小袖とて本所旗袴のよいふとてむきつゝは
まありともよとね珠とていふとて目とていふとて棚よ打つとて
元和のいひはいふとて世棚とていひし様ありとて屋化り田舎人をいふとていふとて
かつむとて室所をいふとていふとて結の粗文唐衣袴地むきとて
いふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
さうなるいふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
恥し顔ありとていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて
棚のおと通り行ふとていふとていふとていふとていふとていふとていふとて

諸本町... 伊豆... 花色... 壽の字... 朝鮮人... 實延元年... 寛延元年... 我衣子享保十一年... 安永以前...

諸本町... 伊豆... 花色... 壽の字... 朝鮮人... 實延元年... 寛延元年... 我衣子享保十一年... 安永以前... 享保... 安永... 平花... 五十五...

迷子... 唐... 大鼓... 天運... 謝承... 父... 人招子也

迷子... 唐... 大鼓... 天運... 謝承... 父... 人招子也... 享保三年... 平花... 五十五...

枋... 振賣札... 棒手振... 枋... 和名抄行旅具枋和名阿布古新撰字鏡

有終多々逢期... 和系雅之楹

檐尖粗輓檐匾粗三才同國會禾檐負禾具也其長五尺五寸刻匾木为之者

謂之換檐石日本為之謂之楹檐匾者宜負器与物口者宜負薪与米也

あまの... 相木のこ

通之... 天秤棒

... 忘じ... ともむ

... 曲あま青麗...

... 一方...

... 懐妊...

... 物...

... 前...

... 源氏...

... 大...

... 方...

... 五...

... 振...

... 商...

... 人...

... 日...

...

八...
又...
...

絹。小関物。木綿。麻。蚊屋。紙帳。友誼札。上下に教免はぬ。一匹。唐紙。金
小分香具。多きびからず。本流。び。生流。り。ぬ。糸。まん。ち。わ。く。
絹布切帯。紙。漸。た。ぬ。つ。も。若。か。じ。油。鍋。薪。土。あ。ろ。わ。き。物。の。本。
ぬ。へ。る。ふ。ん。菓。子。在。流。り。れ。糸。の。は。教。免。は。ぬ。振。賣。者。
若。者。も。じ。な。い。時。の。な。り。物。の。産。地。銘。を。し。ら。へ。り。味。香。酢。
あ。ろ。わ。き。ぬ。へ。ん。よ。ろ。く。と。い。は。ぬ。餅。粉。も。も。う。ん。つ。ひ。さ。右。手。年。
歳。下。十六。年。と。い。は。老。札。令。出。す。日。改。者。か。結。き。の。
し。師。匠。の。金。汁。あ。ま。り。あ。ら。ぬ。札。流。す。と。い。は。ぬ。振。賣。自。放。の。
あ。ろ。わ。き。延。宝。七。年。春。二。月。十。二。日。振。賣。商。人。櫻。の。秀。出。本。流。の。人。も。う。く。

物を買丸直す出スヲ拂
云云枚除ノ意ニ当レリ
又コレヲ濟スト云モ令清
ノ意後ノ義ニ通ヘリト
云リ

近口露。吹。味。生。類。之。奴。札。出。入。人。教。改。南。年。新。形。の。振。賣。の。志。
亦。令。信。止。依。之。先。進。の。知。れ。世。に。名。也。と。い。は。ぬ。は。流。の。人。も。う。く。廢。道。
わ。く。も。の。後。を。し。ら。ぬ。と。い。は。ぬ。わ。く。も。の。西。部。織。爲。の。棒。の。振。賣。
し。ら。ぬ。も。の。あり。今。も。な。り。と。い。は。ぬ。ぬ。高。か。り。と。い。は。ぬ。人。も。う。く。と。い。は。ぬ。
わ。く。も。の。後。を。し。ら。ぬ。と。い。は。ぬ。了。意。の。浮。世。仕。子。の。家。の。格。を。し。ら。ぬ。と。い。は。ぬ。今。も。の。し。ら。ぬ。
も。う。く。身上。唯。初。の。と。い。は。ぬ。と。い。は。ぬ。○。十。露。盤。詩。建。長。寺。田。首。東。帰。集。
認定。盤。星。元。是。愚。且。休。分。兩。分。銀。人。言。八。兩。半。斤。重。我。見。知。他。算。得。廉。
箇。へ。の。青。豆。時。半。九。文。と。い。は。ぬ。人。も。う。く。銘。臺。此。箇。日。今。年。
し。ら。ぬ。も。の。後。を。し。ら。ぬ。と。い。は。ぬ。紙。畫。有。り。一。倍。つ。振。賣。者。も。う。く。

信徳
 白濁
 我路
 洞
 箕山
 此
 白濁
 我路
 洞
 箕山
 此

商人の糊者... 山... 耳の垢... 古...
 商人の糊者... 山... 耳の垢... 古...
 商人の糊者... 山... 耳の垢... 古...
 商人の糊者... 山... 耳の垢... 古...
 商人の糊者... 山... 耳の垢... 古...
 商人の糊者... 山... 耳の垢... 古...
 商人の糊者... 山... 耳の垢... 古...
 商人の糊者... 山... 耳の垢... 古...
 商人の糊者... 山... 耳の垢... 古...
 商人の糊者... 山... 耳の垢... 古...

明和二年千柳点
 檀浦何ヲモ後家ハ十
 九文
 ○日本橋通り二町オ
 十九文店アリ其横小路
 ナ十九文ヨコト呼リ

後珍夫兵独吟... 我家... 九文... 白... 我... 洞... 箕山... 此...
 後珍夫兵独吟... 我家... 九文... 白... 我... 洞... 箕山... 此...
 後珍夫兵独吟... 我家... 九文... 白... 我... 洞... 箕山... 此...
 後珍夫兵独吟... 我家... 九文... 白... 我... 洞... 箕山... 此...
 後珍夫兵独吟... 我家... 九文... 白... 我... 洞... 箕山... 此...
 後珍夫兵独吟... 我家... 九文... 白... 我... 洞... 箕山... 此...
 後珍夫兵独吟... 我家... 九文... 白... 我... 洞... 箕山... 此...
 後珍夫兵独吟... 我家... 九文... 白... 我... 洞... 箕山... 此...
 後珍夫兵独吟... 我家... 九文... 白... 我... 洞... 箕山... 此...
 後珍夫兵独吟... 我家... 九文... 白... 我... 洞... 箕山... 此...

五十七年十一月二日
十一月三日
十一月四日
十一月五日
十一月六日
十一月七日

この山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...
其の山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...
其の山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...
其の山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...
其の山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...
其の山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...

其の山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...
其の山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...
其の山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...
其の山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...
其の山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...
其の山に... 其の山に... 其の山に... 其の山に...

蕭編小竹管如今賣韶餉者所吹也 周禮小師掌教蕭

の管とこれと同一 日知録云これとて漢時賣餉止是吹竹今則鳴金と云

抄云合奇蹤十五挑了糖担一頭辨有搖鼓兒泥人兒引線兒紙糊小籠

兒燈州發板兒下々當々これ又餉賣が子遊と賣しこゝろハ三官

餉といハ明より来りし若れ賣るゝとあむ角を吹といハ彼國と

字へは終つて餉屋が傘ハ他諸藩亦傘の如くはる花の枝祇園

とありはあむ餉賣後撰来曲集ハ云々ハ物々新うねくあめ此

白波と云ハ粉をみるゝと云々 ○ 賣松屋葉かやし 四條河

原深八景 云々 忠海の世のうらさ唄 他を云々 賣のりむきし

そのうらさ唄の月法能大徳粉と編ハ云々 法能のうらさ唄

貞享元年の事 人倫刺蒙鼻彙終双子賣世云々 ありゆめありあは

沙汰人のあはる人の悪事云々 人のうらさ唄と云々 只云々 化け浄る

早よ賣什やつと云々 云々 云々 思ふ男女を賣のちちんく

辰とあうらさ唄と云々 云々 買と云々 云々 云々 浄る 遊民の

云々 云々 事云々 商人云々 辻賣終双子といふも是れ云々 元禄云々 我

物云々 控女的心中云々 辨はけりめつし云々 俗相ありなり 俗云々

類云々 けりて云々 あり云々 云々 辻賣の終双子云々 裁を云々 ○ 云々

然る事云々 然る事云々 然る事云々 漢土云々 紙西といふ 東京

夢華録より蛮四より象の来ると云ひて御街遊人嬉集觀者如

織賣撲土木粉捏小象兒并紙畫者人携帰以為献遺 乙あが

等 三ツモ

花句付一倍は倍 炮烙園世のあひの越領る○人倫訓蒙学彙より

法 たのけ 夢 ま の 何 なに を 遊 あそ び 持 も ち 人 ひと の 家 いへ の 庭 にわ の 内 うち

よ よ 今 いま 夢 ま あり あり 今 いま 夢 ま あり あり 今 いま 夢 ま あり あり 今 いま 夢 ま あり あり

夢 ま の 後 のち 夢 ま の 後 のち 夢 ま の 後 のち 夢 ま の 後 のち

災 わざ 難 がた は あ あ り あり 災 わざ 難 がた は あ あ り あり 災 わざ 難 がた は あ あ り あり

傍 かたわら の や や 夢 ま の 傍 かたわら の や や 夢 ま の 傍 かたわら の や や 夢 ま の 傍 かたわら の や や

又物ウリテ其教ヲ
ヲミテ見ス其物教
ヲラスニテ人ヲ欺クコレヲ
呼テハナチ擧ムトヘリ
イカナル故ニカ思フニ辛

治拾遺ハ東大寺花
巖舎ハ大佛殿内ニ高
座ニタテ誦師ノホリテ
堂ノ後ヨリカイケツヤウニ
ニテ出ルニ付云卿

堂建立ノ始籍ナル翁
キタルコニ本朝ノ上皇至
ノ止マテ大舎ノ誦師ト

ス賣ル処ノ籍ヲ経札ニ
ナク表ニテハ十華嚴經

ト在則籍説簡梵語
ヲサヘル法舎ノ中間ニ

高坐ヲノシテ忽ニヤセ
ナハリヌトイヘル故事ナ

トヨリ云ニテ

唐ノ一ノ大舎ノ

ハナハナ

夢 ま の 後 のち 夢 ま の 後 のち 夢 ま の 後 のち 夢 ま の 後 のち

た た ぐ ぐ り り 事 こと 事 こと 事 こと 事 こと 事 こと 事 こと 事 こと 事 こと

柄 えら の 後 のち 柄 えら の 後 のち 柄 えら の 後 のち 柄 えら の 後 のち

伊 い 呂 りよ 三 さん 線 せん 深 ふか あ あ り あり 伊 い 呂 りよ 三 さん 線 せん 深 ふか あ あ り あり

カ か 買 かひ して して 夢 ま の 後 のち 夢 ま の 後 のち 夢 ま の 後 のち 夢 ま の 後 のち

放 はな 蕩 たう 志 し の 後 のち 放 はな 蕩 たう 志 し の 後 のち 放 はな 蕩 たう 志 し の 後 のち

永 えい 代 だい 福 ふく の 山 さん 夢 ま 人 ひと 参 まゐ り 侍 しやう の 後 のち

永 えい 閑 かん 常 じやう 寛 かん 法 ぽう

一 ひと 休 やす 夢 ま の 後 のち 一 ひと 休 やす 夢 ま の 後 のち 一 ひと 休 やす 夢 ま の 後 のち

砂石集 南都 齒取
唐人アリキ 或在家人ノ
慳貪ニテ利簡ヲ先ト
ニ事ニテ商ヒ心ノミ
アリテ得モアリケルカ
虫ノクモタル齒ヲトラセ
ントテ唐人カモサハ行
又齒一トトルハ銀ニ文ニ
定メタルヲ一文ニテトリ
テダトス少令ノフナレバ
夕モ取ルヘケレ心サマノ
ニクサニフツト一文ニテハ取
ラント云ヤ文シ論スル
ホトニオホカトトラサリ
ケレハサラハ三文ニテ齒
ニトリテ給ヘトテ虫モク
ハヌヨキ齒ヲトリソヘテ
ニツトラセテ三文トラセ
ツ心ニ利カトコソ思フ
ヘケレトモキズナキ齒ヲ
失ヒヌル大ナル損ナリト
云レリコレマコトノ唐人ハ
有ヘカラス唐人ノサマニ
拾チタル者ナルシ今モサル
類ノ者マルハ昔ヨリト
見ヘタリ

羅什が孫々針を呑み他今や... 西京

織田の富の上塗金みぐれ餅米洗隣子... 猫の登るふ

殊に餅米を洗う... 猫の登るふ

自由の... 蓮華商ハ享保二年...

概や柳や梨の実... 蓮華商ハ七月十日...

歯の垢... 兎耳の條 耳の垢...

江戸鹿子... 神田紺屋町三丁目長官...

髪... 鹿子の神田紺屋町三丁目長官...

近時... 入目する者ありや入齒師が招牌...

登茅時年垂耳順彫一目殿状顔醜及引見...

永福寺御堂供養の時上総五郎多富忠光...

茶人は... 或は茶令... 茶を吸ふ時...

小分け... 茶を吸ふ時...

ま... 商ハ...

約め... 古...

とる者此家紋と買つて夢をみるに承應二年己六月十九日町中

仕舞店の夢物にきし切をきりし一代男中うら世の事も仕舞の

乃金をくま風流旗日記に大坂上陸所のことゆいふものがある

仕舞の夢の由隠居に 仕舞の夢ありし夢の條より

商人の貨物何ヨラス久シク不售物ヲ寝カニ置クナド云又借リタル物ノ代ヲ還サスカシタル者ノ方ニ付テモ互ニ是ヲ横ニ寝ルト云モ同クヲ人ノ寝テ使令ニ應セサル意ニ梅翁カ発句借リ出ストハヤ横ニ寝タ花ノ宿

水戸市内堂前町の山土記に云ふに...

此語類目内...

...

...

阿弥陀の聖に...

桂姫...

鳩の飼...

慶庵...

方斎...

...

...

...

...

源平盛衰記 于岡崎
四郎カ子義貞馬ハ白
草モテ鼻ノ毛
ノ花ノ如ク白カリケレバ
夕貞ト云

たゞ傳むらうと云はれ流しよ
本とてハ文自然居士東岸居士
撰とてその傳はるる神筆
自然居士泉州自然洞村の
才子とある東山は信長
雍州府志悲田寺條下
類書纂要と云條墮頭仰面操瓢而乞わらるる
くも苦竹もたは化
用六件のなき又

伊三 卍花の傳はるる
人の家とては
何り
七十一番職人
瓢を敲く
さうや
はるる
若かり

晝不筌兮夜不箇東西南北自由身「京雀」四條坊門通なき町南

秋小鉢抄の住持も空也上人の住あり極樂院と名づく

此寺は極樂院と稱す

つらみ空也の才子
とありし古事なり

今仏と云ふ瓢箪を抄に記し修ししはるる

今も鉢抄の住持をゆつるやある事、空也上人の住あり

て、西京秋のひり、法燈ありとの、林に竹のひり、鹿角と今も極樂院の

住物と云ふを、光明院上願寺の山中に、秋のひり、鉢抄上人

おつと、般舟院の冬、念佛と之、汎冷と云ふ、秋の角と云ふ

と、白濁と云ふりり、空也のありと、名を、秋のひり、と云ふ、五

角と、又、秋のひり、鉢抄と、茶室と、住あり、と云ふ、秋のひり、

よ竹の甄と用と、茶室と、帶と、秋のひり、空也上人

磨丸の茶室と、茶室と、空也上人、神と、古画と

よ茶室と、十徳の紋と、空也上人、秋のひり、秋のひり、

鉢抄と、素堂、秋のひり、秋のひり、秋のひり、秋のひり、

秋のひり、秋のひり、秋のひり、秋のひり、秋のひり、

秋のひり、秋のひり、秋のひり、秋のひり、秋のひり、

秋のひり、秋のひり、秋のひり、秋のひり、秋のひり、

又天台宗の聖道といふ、秋のひり、秋のひり、秋のひり、

善房、秋のひり、秋のひり、秋のひり、秋のひり、秋のひり、

後儀... 甲陽軍泄... 上校家... 盗賊... 見聞... 弘法大師

宗鑑... 真徳... 渡河... 罪科人... 女房... 弘法大師

此の書は... 神ヨリ板イハ共ハニ

いひおれぬや... 伊弉諾

河内... 白石翁の骨董録

よき有り... 真言秘密の立場

御之... 又云正保元年十月

伊弉登山... 行人武家の如く

別名... 伊弉諾

後世の... 其角が...

春の... 江戸通銀町

町筋... 袖表は改...

外...

神ヨリ板イハ共ハニ
イハ見合スニ

ト一頁ハ
軒
ト一頁ハ

佛像指具の裁のしむれは守るべきとて
又和の西巖寺古洞法師がかる蔵人
の緒を背負左右の肩にあり
糸の色の着る人
今せり呉服といふもの
おまけに
おまけに

○山伏

昭昭カ臨伏寒松秋
判云岑ヲトナルソカ
本根ヲ枕トモコノ侍
シモスナカリテイホリ
ノミヤスト空ムヘカラス云
○夫木集アヤアマテ
峰ヨリクダス柴車イリニ
心ヤソミガフダナル
コレ蘇民將末子孫蘇
昌符ヲ書テ人々門
戸ニカケシムルハ山伏ナ
シカイリ蘇民書札ト
云ナリ

春米のせり
信長公天下と云
駿河あり
馬を
山伏東より
推し
春米のせり
信長公天下と云
駿河あり
馬を

海の舟を月の清り知ぬお女あり巖島の内侍八年をむくも
仕へ侍るや又伏見の桂姫を代り同号と傳へて非功皇后の君と
奉祀せられたる侍を家々のゆくゆくはまた家々のゆくゆくは
ほは他を養ふやめ女子生るれゆくは家号と傳へて侍るや
時々赤部より諸家にも出入り錦より紫を帽を戴く侍るや
非功皇后此三韓御征伐の時侍りし侍帽をそのゆくゆくは
安存隨筆に天中菴立志が浮鏡集より委しく記するのゆくゆくは
山城四桂村下河内土村名を累世お侍りし桂女と稱し流役
免許ありの尊祖神功皇后御流常流侍傳へて女子お侍して
累代に化家より河内土村の流役御のゆくゆくは流役ありて
御もその家御のゆくゆくは女子家流のゆくゆくは時代を流役のゆくゆくは
不知り侍るやをゆくゆくは向し侍白紙を頂戴する由不知り此
流役を流役の代へ奉り侍るやを流役を流役の代へ奉り侍るや
先より三宮宮を奉り桂女は流役の若き侍るやを殿中入りの位常
流色を流役の戴き入流の侍るやを流役の侍るやを流役の侍るや
其事跡見聞ふ侍るやを流役の侍るやを流役の侍るやを流役の侍るや
時先伏見清香宮より流役を流役の侍るやを流役の侍るやを流役の侍るや
山崎の辺より流役を流役の侍るやを流役の侍るやを流役の侍るや

流役の侍るやを流役の侍るやを流役の侍るやを流役の侍るや

万治二年己亥刻
 私哥多咄ニ市何と云
 むじり考ニ花を
 らせて福正町の市女
 といふ津島法

あはれみは附だ附たり衣指を指を揚るし按する義残後覺
 大岡は香宮の後此れし時神の市女あり神前の合帯と持て
 此の二度移ひを公笑を強ひて市女に心も賢くも名も大に女房
 女房ののちとも山崎までゆく首途を祝ふなりしは市女あり
 厚く塩尻に伏見の桂姫を代り同号と傳へて津加皇居の君と
 祭神ともしむるなり但し今本郷より法皇も出入をいとく
 桂の里より来りてこれバ塩尻の産湯なり又根を由りて人の
 内はさか何人の家よりたゞ祀をあるのみ桂の里より来た女
 衆はかゝるお出立の難うしむるに女も眉はくろくもくもくも小神を

かゝり我ををうらむと名を新婦いりむい取を造り何と云
 めと云は事此れに依りて桂の里より来た女もついでに
 祠よりいりて祀をそのをを造りその祀の福ある
 御事作りさやいりかく巫女めりて推してありあり
 此古に傳へしはいつの頃かあるなり乃のぬりたりとあり
 古事書ふをありし山城名勝志に御香宮の記三年代詳に大岡
 これを大亀谷に移されしありて今も舊地今のおはるは
 その神の女を桂女といふなり桂の里に考へしやいりあり
 頭より卷きたるありて女といひしは又桂の里の女若より

鮎と書きたり俗傳に神功皇后筑紫にて鮎と為のひしと

いふはなれは成るに似て先祖彼皇后に傳ひまきしれど

いひ皇后の簪帯といふもかろく帯より物のみよきと

又竊多し事河の八幡
の正室寺より阿龜の方と申す將軍家名召 職人を建保の年桂女に

あり三十二番職人奇合桂女述懐の歌名ありはあま上臈け

浦やもれとらひきりて判之上句ハ桂々境談の持言

下句を桂々朝暮かま下まの郷談よ上臈といひていし

を消魂の舞にけしはゆりやもとり又花の歌まはよと種の本

いふはなれは成るに似て このあれるは衣猪の條より 春湊浪語よ古より

京都將軍の御よありと布きりて盤曼少しうと巻もいひ

たの事よ何處に嫁れよ古式ありとやすまのあまここの神

桂女に派りては成るに似て或を桂の里に如く用ふといひ

徳まよりそり此説いれとやあれは彼桂々といふそのひり

余りほひも唱ふとありのちしうとさうとも出書しあむ又

とくき、粗か吐し桂のよはいし此のとも銘と結して名あり

桂銘とてせよのしをやとよかた者銘をいつくふも何れど是れ桂

女とせよはくさうり此銘も桂のつらうと河免と度中りしひり

盤曼帯と腹帯ととていふは 是の帯とひて自ぬ

大系... 其里... 丹波... 神子... 女... 其... 物... 化... 八...

此の... 浦... 結... 白布... 右子... 我... 今... 母...

まぬの古今の通法して徳祖師より流りぬれども今も
今も是とてまある人々を合を求むるもそれなるありて
澆山キナウの流りたる法をま令ふとてし茶を流の古画より日
希のあき人言へるもまの腕の香と焼少分法を流ぬきた
者一人又酒打おして若神をも若一人の流りたる河をゆるく
かきりまはる香と焼を小刀づりさしつた後香をひりたり
又山伏の流りたる法も若あり又親場と鉄火を流すもいつ
何り又膏茶とまのれ腸スチを流すもその傷の膏茶を流すも即
験ケンとてまの河り 近年これあり平の雅志付くやその腹を利刀
よを推しきりたる切せり 利刀の又とけり

日本田圃とマツル
あし愈々如てまはる血も出ぬ外に又川の流りたる法を流すもその傷の膏茶を流すも即
験とてまの河り

日本田圃とマツル あまの流りたる法も若あり又親場と鉄火を流すもいつ
鳩の流りたる法も若あり 此名義あまの流りたる法も若あり又親場と鉄火を流すもいつ
鳩やあまの流りたる法も若あり あまの流りたる法も若あり又親場と鉄火を流すもいつ
此流りたる法も若あり あまの流りたる法も若あり又親場と鉄火を流すもいつ
あまの流りたる法も若あり あまの流りたる法も若あり又親場と鉄火を流すもいつ
鳩の流りたる法も若あり あまの流りたる法も若あり又親場と鉄火を流すもいつ
あまの流りたる法も若あり あまの流りたる法も若あり又親場と鉄火を流すもいつ
あまの流りたる法も若あり あまの流りたる法も若あり又親場と鉄火を流すもいつ

寛文十年板

西武獨吟百
 韻海二古質三物四の五し六荷七の八賣九の十も十一と十二二十三季十四の十五も十六ん十七自注
 前十八附十九比二十引二十一カ二十二ル二十三ズ
 見テ
 誠負て洛中と物二十四を二十五出二十六る二十七物二十八若二十九と三十の三十一ひ三十二を三十三り三十四し三十五より三十六後三十七綴三十八る三十九と四十て
 名四十一付四十二し四十三も四十四の四十五て四十六は四十七瘋四十八人四十九の五十病五十一を五十二負五十三ひ五十四の五十五は五十六梅五十七を五十八持五十九つ六十る六十一を六十二可六十三あり
 貞享の六十四初六十五徳六十六を六十七い六十八定六十九む七十あ七十一く七十二唐七十三物七十四の七十五ひ七十六く
 嶺南雜記英震方潮州大麻瘋極多官為立麻瘋院
 如養濟院之設也在鳳皇山上聚麻瘋者其中給以出米糧有麻瘋頭治

之其名亞胡衣冠濟楚頗能饒富人家有吉凶之事瘋人相率登門
 索錢索食少則罵詈必先賂亞胡求片紙粘門瘋人即不敢肆院中
 有井名鳳皇井甘冽能愈疾瘋者飲之即能不癢肌肉如常若出院
 不飲此井即仍癢矣入院游者瘋頭特設淨舍淨器以款之其中男女
 長成自為婚匹生育如常人瘋女飲此水面目倍加紅潤光彩設有登
 徒犯之次日其女宿病已去翩然出院而登徒侵染其毒即代其瘋
 不數日眉鬚脱落手足麻痺肢節潰爛而死矣のり此二紙三を四
 求片紙粘門いひ二今三仕切札あり彼四を五かく六似七あり
 瘋女疾と人八の九俗十説十一あり十二瘋人十三を十四俗十五あり十六ん十七が

